保健室ですよ

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
保健室ですよ

【Ｎコード】
Ｎ７７４２Ｓ

【作者名】
鈴木真心

【あらすじ】
保健室は保健室です。
保健室は学生の保健を管理するためのものであり、それ以上でも以下でもありません。
保健室は保健室として利用しましょう。
高校の現国教師　結城真喜と、変態保健医　酒井羽里の、ババルの障害に阻まれながらのにっちもさっちもいかないラブまでは遠い攻防戦。

変態保健医との初戦

目が覚めた。
天井が見えた。
白かった。

保健室だった。

「大丈夫ですか？」

ぼんやりとしたあたしの頭を撫でながら見下ろすにこやかな笑顔の男が目に入る。
酒井羽里（さかいうり）、保健医だ。

ちなみにあたしは結城真喜（ゆうきまさき）、同じ高校の教師である。
ゆうきまさきって語呂悪いよ、お母さん。

どうでもいいことを考えた。

頭が痛い。
何でだ。

「結城先生、倒れられたんですよ」

相変わらず頭を撫でながら、酒井先生が優しくそう言う。

倒れた？
あたしが？
大学卒業までうっかり健康優良児過ぎて、皆勤賞だったあたしが？
有り得ません。

「……覚えてらっしゃらないですか？」

そう言った酒井先生の笑顔が、一瞬、黒く見えた。
気がした、ことが気のせい？

「覚えて……覚えて？」

あたしはただ、廊下を歩いてて、今日は日本酒一升瓶まるまる買って、一人自宅アパートの窓から夜桜見物と洒落込むかーとか、思ってうはうはしてて。

『あ、酒井先生、お疲れ様です』

……って、すれ違ったこの人に挨拶して。

『お疲れ様です』

……って挨拶返されて……返されて……。

頭が、痛い。

首裏が、痛い。

この男に、殴られたんじゃなかったか？

「……覚えて、らっしゃいますか？真喜さん」

にっこりと笑った酒井羽里は、やたらと顔立ちがよくて、無性に腹立たしかった。

――お前がやったんじゃ！

何を考えてこの男が犯行に及んだのか。

あたしには、わかりかねますが。

さっきまで頭を撫でていた奴の手は、今、あたしの顔の横にある。

「……何をしてらっしゃいますか？」

「いやですね、言わなきゃわからないですか？」

くすくすと悪戯めいた笑い声を零しながら、無性に腹立たしい端正な唇が弧を描く。

言わなくていいから、やめてくれないかな。

凄みを利かせて睨んでみたものの、どうやらあまり効果は見込めないらしかった。

結城真喜二十八歳、何故か未だに独身貴族。
この歳で、大変な騒ぎに見舞われてますが。

「……やめてくださいませんか」
「大丈夫です、俺、自信ありますから」

何の自信のお話ですか、何の！

にこやかな笑顔とは対照的な台詞を堂々と吐いて、奴の右足がベッドに乗せられた。
ぎし、と軋んだ鈍い音。

いよいよやばい。
いよいよまずい。

気付けば目の前には端正過ぎてやっぱり無性に腹立たしい顔。
その顔が傾いて、より近付いてくる。

――ごっつ！

必殺、デコ突き！
ただの頭突きだけど！

――が。

頭突きをした。
痛かった。
あたしの方が痛かった。

……何てことだ。
奴の方が石頭とは。

「残念でしたね、真喜さん」

にっこりと笑顔を浮かべた酒井先生は、容赦なくあたしの両手首を拘束していた。

あたし結構、石頭なのに。
めちゃくちゃ悔しい。
そして、結構デコが痛いという哀しき事実。
でも負けないよ、お母さん！

「保健室ですよ」
「そうですよ、だから活用しませんか」

活用法、間違ってるから。

「保健管理の為にある場所ですよね？」
「保健体育を実践しましょう」

意味がわからん！

ああ言えばこう言う。
酒井羽里という男は、こんな男だったか？
あたしが知ってるこの男は……

……
……

……よく知らないけど、こういう男じゃなかったような……？

場違いな思考を巡らせるあたしに、小馬鹿にしたように酒井先生が口を開いた。

「僕をよく知らないでしょう、真喜さんは」

知らんがな！
文句あるか！

相変わらず威力いまいちな睨みを効かせるあたしに、ふっと鼻で笑うこいつ。

覗き込むように顔が近づいて、睫毛が触れそうなほど、端正な顔が至近距離になる。

ついでに。

その華奢に見えてしっかりと節ばった長い指を持つ綺麗な手は、するするとあたしの腰を撫でさすっていた。

何やってんの！

無言の攻防は顔面戦争だけでなく、腰付近でも勃発中だ。

あたしがつい、と腰を引けば、ねちっこくその手が追い掛けてくる。

「……あの、やめてください」

「煽ってるんでしょう？」

大変、まさか保健室にてバベルの障害が！

ま、負けないからねお母さん！

両手は相変わらず拘束状態で、うんともすんとも言わないほどに動かせない。

よってあたしは、ひたすらに追撃を繰り返すやたらと綺麗な手から、腰を捻り、捻り、捻り！

捻りまくって避けまくる！

避け……

「ひあっ」

ち、ちょっとお！
あんたどこ触ってんの、どこを！

するりと難なく侵入を果たしたそれは、するりと、さも当然とばかりに、あたしの太腿を撫で上げた。
へ、変な声出た！
ばかあっ！

「ここが善いんですね」
「違っ……ひんっ」

気を良くしたのか、にこりとまる瞳――と、容赦なく遠慮なく突き進むその手が、今度は内腿をゆるりと撫でたもんだから、また妙な声が口を突く。

「……僕はずっと、あなたを知っていましたよ」
「……は……？」
「……もう黙ってください」

何だかもう、息もあがってきたあたしは、ただぼんやりと、酒井先生を見上げていた。
囁くように言われた言葉と、閉じられていく瞼、少しだけ傾けられた顔が、どんどん近づいてきて……

……って。

「酒井先生ー！いるー？部活で怪我しちゃってー」

がらっと開けられたドアから、元気よく投げられた男子生徒の声。

「……」

「……仕方ないですね」

にっこり笑った酒井先生は、あたしの手首をするりと、さっきまでが嘘みたいに、あっけなく放した。

「……また今度」

呆然とするあたしの耳元でそう囁いてから、カーテンをくぐって出ていってしまった。

……あたし今、流されそうになってた……？

間。

「いぃやあぁああっ！」

我に返ったあたしの絶叫が、保健室だけに留まらず、夕暮れの校内

に響き渡った。

「あれ、結城先生いんの？」
「ああ、具合が悪くてね。うなされたんでしょう」
「ふーん、酒井先生も大変だな」
「保健医ですから」

お前のせいだよ、この野郎！

生徒と奴の会話に、一人拳を握り締め、心の中で突っ込んだ。

先手、変態保健医

迫られた。
保健室で、迫られた。

あいつ、マジあり得ない。

というわけで、昨日は散々だった。
ほんっと、マジ、真面目に散々だったと思う。

くそ、夜桜見物も一人手酌もおかげてし損ねたっつうの！

「あいつめ……！」

教師らしからぬ科白を吐いて、朝っぱらから、やる気なく職員室のデスクに突っ伏していた。
今のあたし、本気でやる気がありません。

あの変態保健医ならここで、

「じゃあヤリましょうか」

とか言うんですかね。
あっはは―。

ばっか野郎。

「結城先生、どうかしたんですか？」

ぶつくさ言いながら柿ピーを貪っていれば、隣の同僚教師、笹木繭（ささき　まゆ）がにやにやしながら椅子ごと移動してきた。

「何が”結城先生”か、気持ち悪いな」

「あ、そ？たまにはと思って」

茶目っ気づいて笑って見せてから、あろうことか、マイ柿ピーに手を付ける繭。

まあ、いいけど。

繭は同僚の、そして同性のあたしから見ても何だか色っぽい古典教師だ。

むっちりとした胸元にはEカップの乳を隠し持っている。

いや、見せびらかしてるけど。

そこ、割り箸何本入るんですか？

そして、すらりと伸びた白い手足は細く華奢。

柿ピーを食い散らかしつつ舐めた唇はぽってりと艶めかしく、クリアな赤いグロスがぽっと咲いた花のように何かを誘っている。

何を？

男をでしょうね。

「授業以外そんなんじゃ、教頭に怒られるわよー？」
「教頭より奴の方がおそろしい」
「奴？ああ……酒井先生？」

当たり前のように自然にそう言った繭を、思わず飛び起きて凝視する。

何で何で！？
何でそこわかっちゃうの！？

「……やっぱりあいつ、ヤバいんだ……知ってたなら教えてくれたらよかったのに……！」
「いや、違うから」

何がどう違うの！？
ヤバいのは真実でしょ！？

「……じゃあ、じゃあ、ね？何で酒井先生の名前が？ヤバいからじゃないの？」

呟いたあたしに繭が寄越した視線は、何故か憐れみ満載だった。

……何。

「何でって……酒井先生、もろ宣言して回ってたんだよ？」

知らないの？と続けて、かくっと首を傾げる繭。

知らないの？って言われても。

知りませんよ。

何を吹聴して回ってんですか、あいつは！

「”結城先生は必ずモノにしますから”って」

……

……

……”モノ”？

は？

いや、いやいやいやいや、”モノにしますから”？

あたし、呆然。

ついでに自失。

「……な、何のハナシ……」

あたしをわざわざ宣言してまで狙う馬鹿が、この世にいたと！？

自分で言うのも何だけど、あんたと並ぶあたしは、月にすっぽんと

言えば、すっぽんが逆上するんじゃないかってほどなんだけど!?
ついでにそれはあの変態保健医にも当てはまる。
それを思うことさえ胸くそ悪いから、もちろん口にはしないけどね!

「あ、酒井先生じゃないですか」
「ああ、保健だより出来ました?」
「はい、持ってきたのでホームルームに配ってくださいね」

あたしの言葉を大いに遮り、元凶登場。
笑顔で!
笑顔で登場かよ、ちくしょうが!
今大事なとこだったんだよ!

白衣に身を包んだ変態に、教師達が笑顔で声を掛けている。
騙されてるんだな、皆。

そんなことを思いながら、どこか遠くに飛び立っていたあたしは、
この後、校長の爆弾発言投下により、戦場へと引き戻されることとなる。

「いやあ酒井先生!保健室に結城先生、連れ込んだんだって?頑張りたまえよ!応援しているからな!あっはっは、若いってのはいいねえ!」

は?

校長、つるっぱげで何言っちゃってんの！？

「あはは、もうご存知ですか」
「まあ、下手は打たないだろう君なら」
「生徒にバレるようなことはないですよ」

あははははっとか、軽いタッチで笑いあう二人。
それを、和やかに見守っている教師陣。

は？
見守る？
皆、何を見守ってるの？
明らかにおかしいこと口走ってなかった？
いくら顔面偏差値が高かろうが、おかしいもんはおかしいでしょ？

「ね？皆、知ってんのよ」

相変わらず柿ピーを食べながら、繭がにっこりと、いやーな、それでいてやっぱり艶めかしい笑顔を浮かべて言った。

あたし、呆然。
ついでにまた自失。

おかしいだろうよ、この学校！

「あ、真喜さん、皆さん祝福ムードでよかったでしょう？」

あたしと目が合った変態保健医が、してやったりみたいな顔で、そう言って笑った。

……転職してもいいですか？

後手、ジャムパンと牛乳をアイテムに防御に徹する現国教師

殴りたくなるのは何故だろうか。

梅雨の晴れ間に、あたしはそんな物騒なことを思うんですが。

――というわけで、あたしはただ今お昼休みはうきうきランチタイム中。

ああ、なんていい天気。

「久しぶりに晴れたなー」

学生でなくたって、昼休みは楽しみなもので。

あたしも例に漏れず、ジャムパン片手に屋上でぼんやりしていた。

「パンには牛乳よね」

「牛乳は日本人の体質には合わないって知ってました？」

……。

「……パンには牛乳よね」

幻聴を華麗にスルー。

ああ、イヤだなあたしってば。
疲れてるんだ。
ここのところ、中間テスト問題作ってて忙しかったもんね。

視界に一瞬入った何かを見ないように顔を逸らし、そのまま、また空を仰いだ。

幻聴だ幻聴。
牛乳飲んで、気をしっかり持ちなおそう。

ぢゅ――――――。

「あんまり飲み過ぎると、消化しきれなくて下しますよ」
「ああ、晴れてよかった」
「……そうですか、いい度胸ですね真喜さん」

……。
……、
……

……視線が痛い。

あたしが顔を逸らした反対側、左に座ったらしいそこから、射抜かんばかりのそれをひしひしと感じる。
て言うか、何で名前呼びなの。
何で先生って言わないの。
それ、学校っていう領域での暗黙の了解じゃないの。

ストローをくわえたまま、さて、どうしたもんかと考えを巡らせていれば。

「真喜さん」

何だよ、結城先生って呼べっつの！

「ジャムパン」

ジャムパンが何なんだ。
まとめて喋って、お願いだから。

「すきなんですか？クリームパンより？あんパンより？食パンより？カレーパンより？」

うるさいですよ。
何ですかそのお決まりみたいな語呂合わせ。
ジャムバターチーズでランランラーンですか。
それで言うならメロンパンの女の子がすきですよ。
教えてやんないけどね！

「歯磨きマンのキャラクターデザインが斬新だと思うのは、僕だけ

でしょうか。真喜さんはどう思います？」

知るかよ！
何なのあなた、思考でも読んでるの！？
何でモノローグで会話が成立しちゃってんの！？
こわい！

「保健医としては、あん、食パン、カレーパン……ジャムにバターにチーズときて、おにぎりにメロンパン、そして敵役にバイキンじゃないですか。そこに正義漢であり全てを払拭すべく歯磨き粉を持ってきたセンスは素晴らしいと思うんですよ」

……ああ、そう。
そういう隠し要素があっての彼の登場だったのかは、あたしにはわかりませんけどね。
情操教育には、確かにいいんじゃないですかね。

顔は逸らしたまま、表情だけをしかめてストローを噛む。
答えてはいけない。

「ストロー噛んじゃいけませんよ。通りが悪くなります。……ああ、」

あなたはお母さんですか。

「欲求不満ですか？」
「！？」

あ、危ない！
うっかりレスポンスしてしまうとこだった！
そんな誘導には乗らないぜ！

噴き出しそうになった牛乳を何とか飲み込み、そっと、溜め息を一つ。
がんばった、あたし。
こいつのペースに乗せられてはならん。

「ジャム、はみ出してますよ」
「えーっ！？ちょ、そこ！？早く言ってください！あーもう……あたしのジャムパン……っ」

ばっと、勢いよく振り向いた、

ら。

ちゅ。

……しーん。

「ああ、牛乳の味ですね」

にこっと笑ってあたしの唇を舐めた酒井先生が、至近距離で、そう言った。

は？

え、何、何ですか。

あんた今、ちゅってキスとかしませんでしたか。

ついでに、唇舐めたりしませんでしたか。

保健医としての情操教育云々の件、ついでに欲求不満の件、必要あった！？

「下したら真喜さんの所為ですね」

満面の笑みは、梅雨の晴れ間にやたらと映えて、きらきらとしていた。

「……人の唇舐めといて、下したらあたしの所為とか言ってんなー！！！！！」

「いやですね、舐めたのはオプションで、メインはそっちじゃないですよ」

「そういうこと言ってんじゃなーい！！！！！」

「あはははは」

あたしの叫びが空に融けた３０分後。

あたしは授業中に、まんまと腹を下した。

マジであいつ、覚えとけよ！

……何で振り向いちゃったんだろう。

泣きたい。

日曜日ストーキング

休日は休みたい。
にも関わらず。

あたしの自宅は、保健室になりました。
――な　ん　で　だ　よ　！

聞いてもいいですか。
いいですよね、ええ、ええ、いいに違いないでしょうとも。

「……何をしてますか、酒井先生」
「やあ、おそようございます真喜さん」

「やあ」って何。
どんなキャラ設定なのあなた。
さらさらの黒髪に切れ長な涼しげ目元、男のくせに美白万歳なきめ細やかさで輝く美肌に、もちろんとばかりに細身に見えて筋肉質な１８０センチの体格をお持ちなデルモもびっくりな設定ですよね。
ついでに笑顔はふわっと優しげになっちゃったりして、そのＧＡＰにずっきゅんどっきゅんってか。

……オプション盛りだくさんでズルい。

そんなわけで日曜日の朝。
っていうか、もう昼だけど。
ちょっとコンビニまでーとか思ってドアを開けたら。

酒井先生がいた。

これ、いわゆるストーキングとどう違うの。

「……”おはようございます”ですよ、酒井先生」

「いやだな真喜さん、羽里と呼んでくださって……」

「呼ばない、呼ばせない、呼びたくない。3ない運動実施中なんです」

何故にアナタをそんな親しげに呼ばなあかんねん！

エセでもなっちゃうよ関西弁に！

だいたいね、だいたい何さ”羽里（うり）”って！

ちくそう！

洒落っ気づいた名前しやがって！

しかも晴れやかな休日にストーキング！？

やっぱりストーキングって言っていいよね！？

ちょっとお顔がよろしいからって、そりゃあないんじゃないかね君！

よし、コンビニ弁当は諦めよう。

「……じゃ、さようなら」

くるっと踵を返しドアを閉めようとした、ら。

がっ。

「……」

「……。真喜さん、何をしようと？」

ものっそステキングな、しかし、明らかに腹黒さ満載な笑顔で、

ドアの隙間に

足を挟み込まれた。

――何なの！？

ここ、あたしの部屋なんだけど！？

美形が何でも許されるなら、きっと世界は終わってると思う。

「……」

「ふふふふふ」

「……」

「ふふふふふふふ」

「……」

「ふふふ、……おや、どうしました真喜さん」

「……わからないなら脳味噌の活動が停止してらっしゃるのでは？」

気持ち悪いくらいにうふうふ笑ってるくせに、それでも美形の域に

身を置くこの男が、心底、小憎らしい。

小憎らしい？
大憎らしいよ！

「大憎らしいだなんて、ユーモアに乏しいんですね。現国の教師なのに」
「モノローグは読んじゃいけませんって、お母様に教わりませんでした？」

余計なお世話ですよ！

憎々しげに睨みつけてみれば、それはそれは綺麗に笑われた。

……余計に腹立つわ！

だいたい、だいたいね、今日はお休みなんですよ！
天下の休日万歳なんですよ！
何でこいつに……何で、こんな危険な男に……

お茶を出さねばならんのか！？

「お茶くらい、いいじゃないですか」

だから、モノローグ読むなよ！

音も立てずにお茶を啜りながら、さて、とばかりに酒井先生が立ち上がる。
やっと帰るのかとぼんやりそれを眺めながら、ふう　と小さく安堵の溜め息を漏らした……
……んだ、けど。

「では、」

ぐいっ。

「へっ？」

ぼんやりしてたのが仇となったのか。
本当はちょっと、やっぱりこの男は綺麗なんだなーとか、うっかりうかうか見惚れてたりしたのがよくなかったのか。

……
……

……抱き締められてます、あたし！！？？？

何で！？
何故に！？
ホワイ！！？？？

「真喜さん、愛を確かめ合いましょうか」

はっ？愛っ！？
誰と誰が、どんな愛を確かめ合うって！？

抱き締めたままくすくす笑う酒井先生の振動が、小さく、小刻みにあたしに伝わる。
胸元を少し開けたシャツの隙間から見えるのは、確かに男の人のそれで。

……やばい。

こいつ、今更だけど、しっかり男だ！

本当に今更そんなことに焦って、もごもごと藻掻いてみるけど。
無駄に筋肉のついた腕は、思うように離れてはくれない。

どうすんのあたし！
てか、めっちゃ息苦しいんだけど！

「そう暴れないで、優しくしますから」

意味わかんないから！
そして、あなたが思ってる以上に息苦しいから！

しっかりあたしを抑えつけたままに、ゆっくりと倒されていく体。

……と、それでも息苦しい肺。

やだ、ちょっと。
マジで？
マジで真面目に保健室の悲劇再来！！？？？
てか、肺潰れてるっつうの！

「……ちょ、……う、」
「……真喜さん……」

ようやく胸元から解放された顔が、ぷはっと酸素を求めて口を開ける。
……のが、どうやら催促に見えたようで。

近づいてくる顔。
伏せられていく睫毛。

……あ、やっぱり綺麗だな、この人……

……

……　て、

「……させるかー！！！！！」

がつーんっ。

思いっきりかました頭突きが、しっかりと、奴のデコにクリーンヒットして。

「……イタ」

「あた、あたしは安かないんですー！」

涙目で叫んだ悲痛な声が、日曜の快晴に、高く高く、響き渡った。

「……冷えピタください」

「帰れ！」

ペースに呑まれるな！

頑張れ、あたし！

その一撃は愛か否か

奴の石頭には勝利した。
やれば出来るんだ、あたし。
けど、
戦いは終わらない。
――いや、終わらせてくださいマジで。
今日は天下のお休みですから！

「あの」
「何ですか真喜さん」
「だからですね、」
「何ですか真喜さん」
「何ですかじゃないですよ、何人んちで勝手にするめ食ってんですか」

頭突きに若干のダメージは食らったらしいものの。
引き続き、ここはあたしの部屋。
奴は、するめ（持参）を食いながら、何故か寛いでいる。

「帰ってくださいって言いましたよね？」

一応、確認。
言ったけど。

「『帰れ！！！！！』って言ったんですよ、般若みたいな顔で」
「形容しなくていいんですよ、失礼な」

どうでもいいけど般若って。
あんた、あたしのことすきだとかぬかしてなかったっけ？
しかもするめかよ。
美形な保健医、よりによって人んちでするめかよ。

くさいんですが。

あたしの射抜かんばかりの視線に気付いたのか、ああ　とするめを持ち上げた酒井　（もう呼び捨て）がひとこと。

「胃で膨れるので低燃費なんですよ」

……

……聞いてねえよ！

あたしの密かなる憤慨をよそに、するめ食いつつもフェロモンを撒き散らす酒井。

「暑いですねえ」

そんなわけあるか。
クーラーガンガンだよ。
するめ食うなよ。

「脱いでいいですか」
「もう脱いでんじゃん！！！！！」

ストリップ　イン　マイルーム。
フロム　脳内桃色保健医。

「ちょっ、下は！下は脱がないで！」
「なかなかですよ」
「聞いてない！見たくもない！」
「恥ずかしがりなんですね、そういう真喜さんもいいです」
「あたしの話聞いてる！？」

奴の脳内桃色計画は、

保健室から我が自宅まで被害拡大中。

お母さん、実家に帰っていいですか。

「ここにいてくださらないと、僕が困ります」
「知るか！てか、モノローグ読まないでください本当に！何なんですかあなた、何なんですか！？するめ食わないで本当に！」
「勝手に『そして結局何もなかった』みたいな締めで終わらせようとしていたので、つい」

終わらせようとしてたんです！
その空気、最後まで読んでください！

「保健医です」
「は？知ってますけど」

何、急に。

「さっき真喜さんが『何なんですかあなた！？』って仰っていたので」
「……」
「般若みたいな顔で」
「ほんっと、空気読む気がないんですね」
「するめがすきなんです、低燃費なので」
「もういいです」

勝手にはち切れるまでするめ食ってりゃいいさ。
あたしは無視を決め込も……うと、して。

のしっと、やっぱり押し倒された。

「途中でした」
「流れも読んでください！」
「読んだ結果、こうしました」

なーんーでー我が家で！
ババ　（※バベルの塔より造語）ってんの――――っ！？

わかってる！
こいつ、わかっててバベってる！
そうだ！
保健医なんて、バカがなれる職種じゃない！

いや、……一回りしてバカになってしまった……？

またもや思考は現実逃避して、酒井をまじまじと眺める。

……きっと、美形だからこその葛藤があったりなかったり、したんだろうなあ。
美形でさ、デルモもびっくりなスタイルでさ、そりゃまあ頭だってよかったんだろうさ。
保健だよりの文章を読む限り、学力のない人が書く文章じゃなかった。
あれは、きちんと勉強をした人が書く文章だった。

文章には人柄が出る。

それは文字と同じで、大抵、これは間違っていたことがない。

文章ってのはセンスも必要であって、学力がなくとも、それで書き切る人もいる。

いわゆる才能ってやつだ。

目のつけどころとも言うやつね。

シャープだね。

ただ、学力――いわゆるこれは知識や起承転結におけるまとめ方だけど、これぱっかりは、勉強をしたか否かが、割りと顕著だ。

で、伊達にいろいろ揃っちゃってたもんで、それなりに期待もされて、抑圧されて、フラストレーションが溜まった結果、

『もー若い子わんさかいる高校で保健医やっちゃおーでへへ』

みたいになっちゃって。

実際、このご時世になれるだけの実力があったりしたもんだから、うっかり本当になっちゃって！

……なっちゃって、これなの？

「人選がおかしい」

でへへまで行ったなら、どうせならもっと、ピチピチギャルにしたらいいじゃあないか！

「すみません、何の話ですか」

「は？モノローグ読めるんじゃないんですか？」

二人して首を傾げる。
何このおかしな図。

「ちょっと今忙しくて、意識が逸れてました」
「はあ……」

忙しくて……忙しく、て――

！！？？？

「ぎゃあああぁあっ！な、なん、なん――！！？？？」

あたし、剥かれてる――――！！！！！

「意外にセクシーな下着をお好みなんですね。涎が出そうです」
「舌舐めずりとかしな……やあぁぁあっ、何でだいぶ脱いじゃってるの――――っ！！？？？」
「待てなくて」

待つ待たないとかの問題でなく！
合意がまだでしょうが！

「合意は部屋に入れてくださった時点で成立しています」
「勝手に入ってきたんです！」
「するめを食べた時点で」
「あたしは食べてません！」

未だ自らの衣服をとっ散らかしながら脱ぎ続ける脳内桃色保健医は、
ぐいぐいと防御線を張るあたしにお構いなく、ぐいぐいと戦線突破
を計ろうとしている。
てか、するめは関係ねえ！

もう、やだ！
あたし本当に、イケメンが嫌いになりそうだよお母さん！

ええい、母よ！
我に力を！

渾身の力で膝を振り上げた――ら、

ずんっ、

って、のし掛かってた奴が、ぐったりとあたしに、言葉通り

――『落ちた』。

「あ」
「～～～～！！！！！」

……どこに決まったかは、言わないでおく。

「……ひ、冷えピタ、貼る？」

「……やめとき、ます……」

あまりに無惨な姿だったので、可哀相になって夕飯作ってあげちゃったけど、

「よかった。あれも愛の一撃（ラブストローク）だったんですね！」

とか言い出したから、もう一回、一撃（ストローク）決めてやりました。

「真喜さんの愛が痛い……！」

「……本当にバカなんですね」

早く帰ってください。

暴投、保健室だより

休日さえゆっくり出来ない。
これならまだ、学校の方がマシだと思う。
……どうかな。

「……疲れたー」

――悪夢のような休日を過ぎ。

ようやく月曜日を迎えたあたしは、一時間目を終了したところですでに瀕死だった。
授業中もひっどい顔してたのか「先生また下してるの？大丈夫？」とか言われたし……あのね、先生はあなた達よりはだいぶ大人だけど、まだまだうら若い女性でもあるんだよ。

まあ、メンタル面丸出しじゃ先生としてはまだまたか。
……余計にへこむわ。

「ひっどい顔ねー」

隣でけらけらと笑いながら、相変わらずあたしのお菓子を貪り食う繭が言う。
笑い事じゃない……が、するめじゃないだけマシかもしらん。

「あたしに休日はないのかもしらん……」
「ああ、酒井先生？」
「何で知ってんの！？」

てか、どこまで知ってんの！？

まさか、

うっかりまたもや押し倒されたこととか、
うっかり一日中居座られたこととか、
あたしの頭突きがようやく勝利したこととか、
狙ったわけじゃないけど急所に一撃食らわせたこととか、
あれから部屋がするめくさくなったこととか……

「知ってたりする！？」
「え？いや、あんたの脳内で繰り広げられただろう質問はちょっとわかんないけど」

あ、そっか。

「どこまで知ってんの？」

聞くのもちょっと憚られますが。

「酒井先生が“突撃★結城真喜のご自宅訪問！”なとこまでは」

――何故に。

「……あんたさあ、まさか、これも知らないとか？」

これ？

何の話だ。

まさか、急所に「冷えピタ貼りますか？」とかバカげたことを言ったことは知っているとでも！？

いや、あれはね、流石にあたしも「そりゃねえだろ」と思ったよ？

言った後にね！

あんなとこにそんなもん貼った日には、ねえ……流石にさ、どんな美形だろうが、間抜けにもほどがあるよね。

ヘソでお茶が沸いちゃうかも。

……思考が逸れてしまった。

かくっと首を傾げた繭に、眉根を寄せつつも、同じくかくっと傾げた。

「これ」

ぺらりと目の前に突き付けられた、一枚のプリント。

何何、
保健室だより……

……
……
……

……保健室、だより……

……『職員特別号』？

「……『愛のお宅訪問編』！！？？？」

何これ何これ何コレ！？
あいつ、神聖なる保健室だよりに、何やっちゃってんの！？

目ん玉ひん剥いちゃった！
目ん玉をよ！？
ひん剥く体験って、実はそうそうないはずだよ！？
そして繭は、そんなことよりとさらりと追い討ちを掛ける。

「ちなみにこれ、特別号Ｖｏｌ．１２だから」

12部も刊行しちゃってんの!!??
あたしに内緒で!?
ちょっと!
著作権はどーなってんのさ!

いやいやいや、著作権がうんたらとか言ってる場合じゃない。
著作権以前に、これもう捏造じゃない?
捏造っつーか、もう創作?
創作だよね?
あいつ、ラノベ作家とかになればいいよ!

ぱっと見ただけでも頭痛がしそうな文字の羅列に、プリントを思いっ切り奪ってデスクに叩き付けた。

「……そして保健医を卒業したらいいんだ」
「そんなこと言って」
「わあっ!?」

びくうっと肩をすくませれば、耳元でくすくすと笑うハスキー。

気配消すんじゃねえ!

ジャーッと軽快に椅子のローラーで遠くに避難してから、びしっと人差し指を突き付ける。

「あ、あんたねえ!」
「だから羽里と」

「うっさいわ！妙なもん刊行しやがって！」
「読みました？」
「は？」
「内容、“きちんと”読みましたか？」

……“きちんと”？

ジャーッと繭の前まで移動して、保健室だより職員特別号Ｖｏｌ．１２をふんだくる。

何何、

――『真喜さんはうっとりとした顔で身を任せ』
――『唇を寄せたなら、恥ずかしそうに身を捩り』
――『「早く…下も脱いで」とそっとボタンフライにその細い指を』
――

「お……お前のデニムがボタンフライとか知るか！！！！！」

どんだけ！？
マジで創作ラノベだよ！

「よく書けてるでしょう」
「何得意気にしてんの！？」

そんでもって校長！
何つるっぱげで微笑ましく見守りながら、「いやあ、痴話喧嘩かね」とか言っちゃってんの！？
どこの側面から見たらこれが痴話喧嘩になるわけ！？
バカじゃないの！？

「それは暴言です」
「お前が暴投ばっかりだからだ！」

お得意のモノローグを読んだらしい酒井が、ちょっぴり顔をしかめる。
お前が顔をしかめんな！
あたしがしかめたいんだ！

「違います」
「どこが」
「つるっぱげでバカなところではなく、痴話喧嘩を否定した箇所が間違っていると言ったんです」

……あんたの方が、よっぽど暴言極まりないと思うよ。
つうか、痴話喧嘩じゃないよマジで真面目に。
後から知った事実。

この『保健室だより職員特別号』は、

教師の間で大流行してる代物らしい。

マジでもう、
保健医やめたらいいのに。

汗とパンツと笑顔の君　その1

神聖なる保健だよりは、にわかラノベ作家によって容赦なく汚された。

だけど、

あたしは負けない。

負けないんだ!!!!!!

「結城先生、急いで!」

「何、どうしたの?」

可愛い生徒が、突然、現文準備室に駆け込んできた。

「いいから!」

よくわからないままに手を引かれ、やってきたのは……

「……保健室?」

何故。

嫌な予感と嫌な思い出が一気に駆け巡って、思わず足を止める。
が、若さの勢いと体力に敵うはずもなく、ぐいぐいと引っ張られて体は前進し続けている。
十代マジ半端ないな！

「ちょ、何……！？」
「いーいーかーらー！」

よくない！
よくないんだよ君！
ここがどれだけデンジャラスゾーンか、若さ故に理解してないんだよ君！

「だーいじょうぶだって！」
「何が！？ねえ、何が！？」

固まった表情が仇となったのか、何故かうっかり会話が成立しちゃったあたしと生徒。

満面の笑みを浮かべたリエちゃん（生徒）が、がらっと勢いよくデンジャラスドアを開け……

どーんっと、

あたしを中に、突き飛ばした。

「わっ……ち、ちょっ……」
「酒井先生、連れてきたから後よろしくー！」
「は！？よろしく！？」

軽快に去っていくリエちゃんの背中を見送ることなく、

「こんにちは、真喜さん」

がらっと、

「なかなか来てくれないので、リエちゃんに頼んでしまいました」

無情にも、

「今日こそ、既成事実を作りましょう」

デンジャラスゾーンの入り口は、奴の手によって閉められてしまったわけで。

カ――――ンッ！

容赦なく、リングのゴングは鳴った。

リエちゃん！
何故に魔王に手を貸したりしたの！！？？？
冷や汗だらっだらの二十代後半のあたしに、一体全体どうしろと！？
ああ……おニューのブラウスだったのに、脇汗が止まりません。
脇汗どころか、全身びっしょりだけどね！
何、この恐怖感！
前代未聞だよ！

「真喜さんの匂いがあればあるほど興奮します」
「気持ち悪いこと言わないでください」
「おや、フォローですよ」
「フォローになってません」
「本音です」
「気持ち悪いです」
「本音です」

だから、気持ち悪いっつうの！
で？
リエちゃんは何故、こいつの悪事に加担したわけ！？

「この間、貰ったケーキをあげたんですよ」
「餌付けしてんなよ！」
「たまたまですよ」

てか、本当頼むからモノローグは読まないで！

だいたい、だいたいどうして。

「どうして、あたし？」

愛を語るより既成事実作っちゃうより、何より何より、そこが聞きたい！

ついでに冷や汗拭かせてください。

人様にお見せ出来る量を軽く超えてるんで。

マジ自分でも汗の匂いが……

「興奮します」

「マジ気持ち悪いから！」

「舐めてあげます、大丈夫です」

「……早く答えてください」

言葉あそびに付き合ってはいけない！

床にへたり込んだままに問えば、同じく何故か床に座り込んだ酒井が、おや、とばかりに首を傾げた。

「やっぱり覚えてませんか」

やっぱり？

ひたすら首を傾げて見詰めた先の端正な顔が、初めて、少しだけ困ったような顔をして。

ちゅっ。

「長くなりますよ」

初めて。

はにかんだ顔で、少しだけ、照れ笑いを浮かべた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7742s/

保健室ですよ

2011年11月18日04時14分発行